

## 「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ(留学目的)		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
00-005	ビルマにおける助成の社会的地位に関する研究 —仏教助成修行者(ティーラシン)の事例から		
	ミャンマー	大学歴史研究センター	
	飯國有佳子	総合研究大学院	院生博士

### 研究テーマ(留学目的)の説明 (助成決定時のテーマ。文責は本人)

1980年代以降フェミニズムの影響を受けたかたちで、アジアにおける女性の社会的地位に関する人類学的研究が進められてきた。しかしフェミニズムが成立し発展してきた西欧とはその文脈が異なることから、特に東南アジアにおいては研究を行う上で、その文脈の差異が顕著に表れるディスコースとして宗教が重視されてきた。これは東南アジアの多くの社会において、宗教が文化的・社会的基盤として機能しており、その教義は当該社会や文化のみならず政治にまで深い影響を及ぼしていることに起因する。つまり東南アジア地域における女性の社会的地位を考察する上で、当該社会の宗教観の理解は不可欠なものとなっているのである。

本研究調査を実施する場所となるビルマは、国民の80%以上が上座部仏教を信仰する、いわゆる「仏教国」である。ビルマも含め一般に上座部仏教を信仰する社会では、仏教の構成員とされる「四衆」、すなわち「比丘」(僧侶)、「比丘尼」(尼僧)、「優婆塞」(在家男性信者)、「優婆夷」(在家女性信者)のうち、比丘尼は現存しないとされている。これは、比丘尼が正式な出家式を行う際には、比丘と比丘尼の双方から受戒することとする規定が、比丘尼サンガ(教団)の消滅により遵守不可能となったことによる。また現世において女性として生を受けたことの原因は、男性となった者に比し前世における功德の積み方が少ないことに求められ、女性は宗教的、社会的に劣位に置かれる。このように上座部仏教を信仰する社会において、女性は正式な出家を果たすことができず、また教義上軽視、疎外されてきたといえることができる。

こうした状況を反映し、当該社会における女性の役割に関する既存の研究においては、いわゆる在家女性としての立場から、男性の出家者集団であるサンガを経済的に支え、家庭において経済的・精神的支柱となるといった一元的な語り口が多く、正統な上座部仏教の枠内においてその宗教的役割が重視されてこなかったといえる。しかし実際には、教義上在家女性信者の範疇に留まりながらも、家を出て僧院等で、剃髪し戒名を持ち、戒律を遵守した生活を行う女性が存在する。こうした女性はタイでは「メーチー」、ビルマでは「ティーラシン」と呼ばれているが、その社会的地位及び役割は当該社会のコンテキストに従って微妙に異なっており、特にビルマの場合その実態すら明確に把握されていない。また一般にその社会的地位は低いものとされている。

本研究では実態の把握されていない「ティーラシン」と呼ばれる仏教女性修行者を事例として取りあげ、宗教と女性というテーマから女性の社会的地位やその役割を考察する。特に①正統な宗教体系の内部において彼女らの果たす役割、②女性修行者と人々との関わり及び彼女らに対する人々の認識、③女性全般の社会参加の度合いとジェンダー的役割分業という3点を調査することで、女性修行者だけでなく広くビルマ社会における女性の社会的地位を明確にする。

氏名：飯國有佳子

所属：総合研究大学院大学 文化科学研究科

留学先国：ミャンマー

留学先機関：大学歴史研究センター

留学期間：2001年10月～2003年3月

## 【研究テーマ】

ビルマにおける女性の社会的地位に関する研究—仏教女性修行者(ティーラシン)の事例から

## 【成果報告書】

### 1. 現地調査概要

本調査は、宗教という視点からビルマ社会における女性の社会的地位を明らかにすることを目的としている。特に①正統な宗教体系の内部において彼女らの果たす役割、②女性修行者と人々との関わり及び彼女らに対する人々の認識、③女性全般の社会参加の度合いとジェンダー的役割分業という3点を中心に、村落部を中心に調査を実施した。ミャンマーは自由な現地調査が原則不可能であることから、旅行の際は必ず担当省庁からの同行者が必要である等、様々な制限が加えられたが、所属機関の協力もあり下記日程で、のべ約6ヶ月間村落部での現地調査を行った。「留学・研究進捗状況報告書」でも詳述した通り、予備調査～第2回本調査までは、①及び②を中心に調査し、第3、4回本調査では③及び村の女性の宗教実践を中心に調査した。

予備調査	2002年	2月7日	～	2月24日
第1回本調査	2002年	4月9日	～	5月1日
第2回本調査	2002年	6月22日	～	8月1日
第3回本調査	2002年	10月11日	～	12月1日
第4回本調査	2003年	1月25日	～	3月2日
他地域調査旅行	2001年	11月14日	～	11月15日(ピー)
	2001年	11月20日	～	11月27日(ザガイン)
		3月5日	～	3月22日(ミッチーナ、タウンジー)

調査地はザガイン管区シュエポー県ウェッレツ郡t村落区のt村を中心とし、ミャンマー最大の宗教センターであるザガイン山においても、村出身の出家者の追跡調査を行った。t村の村民は皆ビルマ族で、全員仏教徒である。戸数162戸、村には4つの寺と30基を超えるパゴダ(仏塔)がある。近くの町村には中国人やインド系ムスリムも存在するが、t村にはいない。天水農業を行い、大多数の家では農耕用に牛を飼っているが、豚、鶏、羊、やぎなどの家畜を飼っている家はほとんどない。t村周辺は戒律が厳格なことで有名なシュエチン派の重鎮を多数輩出しており、現在でも隣のhn村では三蔵法師になるための試験に合格した兄弟の僧侶(ミャンマー全土で合格者は過去に9名)がおり、コンバウン時代以降、有名な出家者を多

く排出してきた地域である。

## 2. 村落での女性修行者をめぐる状況

調査村として選択した t 村は、60年代以降非常に厳格な戒律を遵守しながら、仏教関係書籍を出版し一躍有名となった僧侶アシンザナカビウンタの出身村であり、近隣の村も現在に至るまで歴史上有名な僧侶を排出し続けている地域である。t 村で有名な出家者はアシンザナカビウンタのほかに、コンバウン時代に王師として最後2代の王につかえ、イギリス王朝政府からも称号を授与されたタヤンカー・サヤージーがいる。彼はコンバウン王朝最後の王ティーボー一王の頼みにより、還俗し大臣として王に仕えるよう依頼され還俗したが、その直後王がイギリスによりインドに連行される。その後 t 村に戻り結婚し、妻の稼ぎで生活していたが、当時仏教知識は教典学習を行う僧侶により占有されており、その他の人々はアクセス不可能であったため、仏教知識を学びたいと望むザガインのティーラシンらが彼の元を訪れるようになる。最後は、ティーラシンらの招きで、宗教地として有名なザガイン山に赴き、現在の教典学習を行うティーラシンらの祖にあたるティーラシンらに仏教教典に関する知識を授け、同地で死亡する。

こうした歴史的経緯により、他の村落とは異なり、t 村にはかつて尼僧院が存在した。現在50歳の女性は次のように語る。「昔、私の祖母はティーラシンだった。現在男の子が沙弥として出家するように、当時の女の子は、ティーラシンとして出家することが奨励されていた。みんな出家した訳ではなかったけれど、できるだけそうするのが良いと（みな）思っていた。そして一度出家して、ちょうど男の子が沙弥として出家した後、また還俗して普通の生活に戻るように、女の子も還俗して結婚するのが、この村のしきたりだったのよ。もう今ではそうする人はいないけどね。」現在も村にはティーラシンにはならなかったものの、タヤンカー・サヤージーの孫で、ザガインの尼僧院で学生として、仏教の基本的知識とされる仏の拝み方、護呪経文、読み書きそろばんなどを学んだ経験を持つ年配女性も存在する。また、ザガインと呼ばれる僧院・尼僧院が多く集まるミャンマー最大の宗教センターには、t 村の名前を冠した尼僧院も存在する。

しかし現在では、村とティーラシンらの接点は希薄になっている。村人とティーラシン及び僧侶との関係は、あくまで「親しさ」を理由とした個人的関係に基づいており、同じ村の出身であることを理由に、村人と彼らとの関係が保たれるものではない。村人とティーラシンが接点を持つ機会は、①大規模な仏教儀礼等に施主が彼らを招待する、②ティーラシンらが新米の取れるナドー月（ビルマ歴第9月、太陽暦の11月から12月頃に相当）からダボードウエ月（ビルマ歴第11月、太陽暦の1月から2月頃に相当）頃に、農家に新米等を托鉢に回る（新規出家者のリクルートを兼ねる）、③何らかの用事で町の寺に行く、等に限られる。つまり村落と女性修行者との間には、それを結ぶ組織的な紐帯が存在しないといえることができる。昔女性修行者を多く排出し彼女らとの関係の深かった村において、彼女らと村との関係が希薄になった理由について歴史的な調査を行うことは非常に興味深く、また女性修行者の歴史を考察する上で重要であるが、以降村落における女性の宗教実践に焦点を当てて、調査を行った。

## 3. 村落での女性の宗教実践

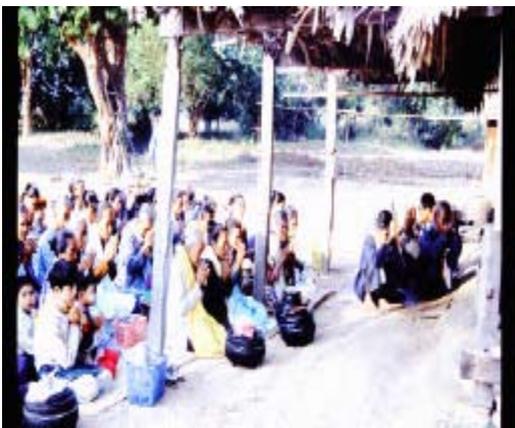
t 村は全員が仏教徒であるというアイデンティティーを持っている。しかし仏教徒であるというアイデンティティーは必ずしも他の信仰を排他的に扱うものではなく、むしろ土着の信仰

を包摂しながら発展してきたことは、上座部のみならず大乘においても知られている。ビルマにおいてもこの状況は同様で、t 村民は仏教徒ではあるが、「伝統的」な精霊祭祀も村では実施されている。

精霊はビルマ語で「ナツ (nat)」といい、仏教の守護神、村の守護霊、自分の身体を守る守護霊、天を支配するナツ、木の精霊等々、様々なナツが存在する。最も有名な精霊は「37 柱のナツ」と呼ばれるもので、王により編纂され祭祀が執り行われてきたが、王権の消滅以降も現在に至るまで祭祀は全国規模で実施されている。t 村で実施される精霊祭祀において祭られる精霊の中にもこれらの精霊は含まれるが、副次的なものである。最も重要なものは自分の親族に関係するナツであり、儀礼は女性の手によって行われる。つまり一組の夫婦の場合、夫の親族の関係するナツも、妻の関係するナツも、まとめて妻が儀礼を執り行うこととなる。儀礼は各ナツの好むとされる指定の場所で、指定の好物を捧げ、満足したかどうかをナツに確認し（供物を持ち上げてその軽重によりイエス／ノー形式で聞く）、満足すれば供物の一部を鳥に与え、残りは参加者で共食する。

また仏教儀礼ではその中心を担うのは僧侶と男性であり、女性はマージナルな存在であるが、「天人 1 人に天女 500 人（天界に生まれ変わるといふ善行を積む男女の割合の差。積徳行為を行う男性の少なさ、女性の多さを示す）」というように、儀礼参加者の男女比は 1 : 3 から 1 : 20 と女性参加者が圧倒的に多い。また仏教行事に関連する様々な集団が t 村には存在するが、男性参加者は一部の限られた年配男性であるのに対し、女性参加者の裾野は広く村の年配女性のほとんどが積徳行為に励み、各世代の女性が何らかの形で関わっている。精霊祭祀の場において女性が主体的役割を果たすのに対し、仏教儀礼においては施主である場合を除き、女性は「縁の下の力持ち的」存在となっている。

本調査により得られたデータを元に、現在“Rituals and ceremonies of an village in Upper Myanmar”という論文を執筆中であり、現地滞在中、所属機関であったUHRC（大学歴史研究センター）のジャーナルに投稿を予定しており、12月には同UHRC 主催の国際会議にも参加予定である。また博士論文執筆のほかに、漸次論文として発表する予定である。



出家式において新規出家者の断髪をする  
女性修行者